

大分県会報 現代俳句協会

第131号

令和6年8月30日



写真と文：足立 攝

現代俳句歳時記 【鬼百合（オニユリ）】

全国に分布する大型のユリ科の植物。葉は互生し、先端はゆるく尖る。花季は七月から八月。花卉は反り返り、オレンジ色で黒い斑点がある。種子は作らず葉の付け根の珠芽（ムカゴ）で繁殖する。

漆黒の壺に鬼百合挿せば父

石倉 夏生

II 予告II 現代俳句勉強会

9月28日(土) 10時半開会 コンパルホール

今年も昨年に続き「現代俳句勉強会」を開催します。勉強会は今年で四回目になります。会員と会員紹介の一般の方は無料で参加できます。

今回のテーマは「俳句の表現領域を広げよう」です。初学の方、初学ではないがもう一度俳句の基礎を学びたいと考えている方が対象です。末尾に応募要項を示しましたので、お気軽にご参加ください。

「季語を主役にする」「助詞の『に』は説明になるので『の』に変える」「映像化する」「凡ワードを使わない」——こんな言説に惑わされてはいませんか。間違いとは言えませんが、少々見当違いです。言うまでもありませんが、俳句は精神の形象化（見えな「思い」を見る「形」に変えること）です。それは映像化ではありませんし、主役

俳句の表現領域を広げよう

は私の「思い」であって、季語ではありません。季語は思いを伝えるための単なる道具です。精神が凡であれば、どんな奇抜な言葉を使っても「表現が奇抜な凡俳句」ができるだけです。

自分の俳句に「マンネリ感」がある人、どうしてもワンパターンになる人、作者名がなくても「これ、あなたの句でしょ」とすぐに当てられてしまう人、そんな人に実作を通じて「俳句の奥の深さを再認識してもらおう」勉強会にしたいと思います。

【実施要項】

- ◇9月28日(土) 10時30分〜14時。昼食は終了後に各自で
- ◇コンパルホール304会議室
- ◇参加希望者は9月5日(木)までに自作2句を事務局まで
- ◇自作であれば既発表でも可
- ◇俳句への質問があれば投句と同時に書いてください。会場ですることができる取りあげます

大会史上初の七二七句

「第34回大分県現代俳句大会」に80人

入賞作品発表／受賞式／講評／合表



【大分県知事賞】

わけもなく尖っていた昭和の日

足立 攝

【大分市長賞】（2名）

もう風を食べ飽きている鯉鱈

赤嶺 広史

春祭り太鼓叩いて星になる

（小6） 合田英伶奈

【大分県現代俳句大会賞】

ふるさとの春を詰め込む握り飯

菅 攝子

【大分県現代俳句協会会長賞】（2名）

春潮に浮くぼくの夢友の夢

（高3） 高 悠介

春うらら忘れることも生きる知恵

御手洗豊海

【大分県議会賞】（2名）

汚染魚の行く宛もなき無月かな

佐藤 優美

また同じ話に戻る日向ぼこ

有村 王志

【大分市教育委員会賞】

廢校のぶらんこキキと泣く日暮

鎌倉真由美

【大分市議会賞】

折鶴よみな舞い上がれ原爆忌

田中 英俊

【大分合同新聞社賞】

桃咲いて村に少女がいなくなる

足立 町子

【OBS大分放送賞】（2名）

目の奥の闇を見ている目刺かな

佐藤 珠幸

蛇穴を出て本能にぶつかれり

赤峯 友子

【TOSテレビ大分賞】（2名）

相槌をうつ相手なく冷奴

早澤まり子

一村の稔り田にある底力

立花真由美

【大分県現代俳句大会特別賞】

被爆樹は永遠の語り部芽吹き初む

小林 陸人

【OAB大分朝日放送賞】

鶴折りても折りても足りぬ八月よ

有永真理子



表彰される香川県の合田英怜奈さん（小6）

【大会秀逸賞】（3名）

春愁や過去を汲み出す仕舞風呂
田代 直之
足し算のできぬ村むら春に入る
上田たかし
極楽は右折でしたね遍路道
幸谷 恵子

【大会優良賞】（8名）

地震の能登打てぬ春田の千枚田
甲斐 素純
捨てきれぬちびた鉛筆一葉忌
神 慶子
柚子風呂へボタン外す間も生涯
河野 輝暉

看取りきて母に紅引く寒さかな
高橋 玲子

抹茶椀ぐるりと回し春を呑む
井上紀久子

炎昼や帽子の中の頭蓋骨
今林 義和

おぼろ夜の端より崩すオムライス
時松由美子

実柘榴や少年兵は戻らざる
吉弘 泰子

【大会奨励賞】（30名）

てのひらに鬼を棲まわせ豆をまく
豊國 隆信

着ぶくれて仕事を畳む話など
本田 圭子

春月が包むマネキンの孤独
白土 正江

連風や過去と未来を手繰り寄せ
本山満理子

敗戦を解放と言う半夏生
岡野 紘宣

石ころもロマンの欠片寒スバル
安部ユリ子

新米のゆるくゆるく塩むすび
井上 則子

綿入を着れば背中に母がある
天田 泉美

しゃぼん玉今日とばしたらどんな色
ゆずりは

軽々と空を押し上げ木の芽どき
安田 文

薔薇の花あなたの棘が抜けないの
加納 知子

断捨離のやせた記憶の年賀状
河野 則子

隠し事ないこともなく葦草
羽住 博之

庖丁を啜えて冬至かぼちゃの意地
平田千代子

太陽を閉じ込めているトマトかな
安森 範明

また来年と言えない国に桜咲く
坂本 一光

鯽起し轟く漁船に海がない
河野 秀子

ふり返るための坂道葛の花
石橋紀公子

手の皺の深きは母似新茶汲む
松井 昌子

たんぼぼをボポと言えたね孫娘
諸富 幹夫

虎落笛この世に不服あるごとく
小野みち子

喪の明けしごとくに水の温みけり
小川 良子

うららかやトロンボーンのアの音昇
高倉 直人

草餅をつまむ女の赤い爪
吉田 素子

花冷えや明日の危うい水の星
川西 達子

行く先を見失いけり花筏
梅木真知子

花は葉に素通りしても卒寿かな
甲斐加代子

めかり時切り口探すサラララップ
佐々木 玉

黒南風や武器に群がる死の商人
後藤 勝利

AIの声がニュースを花卵木
永松 市夫

【大分県現代俳句協会特別賞】

羽子板の音もかるやか雪の庭
後藤 茂

老いてなお少年の日の夏日かな
屋山 一利

《今大回の田原千暉俳句大賞の
取り扱いについて》

6月9日の大会で一席として発表された作品が、昨年の雑詠句会の一席作品と同一であることが同日夕に明らかになりました。事務局はただちに有村会長と連絡をとり、事実経過を調査しました。慎重な聞き取りの結果、両者は暗合（偶然の一致）であるとの結論を得ました。

なお今回の作者が投句そのものを取り消したため、田原千暉俳句大賞は空欄になりました。賞の繰り上げは行いません。

第26回（2023年）大分県現代俳句協会賞

順位	応募番号	タイトル	作者	有村王志	河野輝暉	上田たかし	伊藤利恵	河野則子	中山宙虫	合計点	各賞
1	3	白さるすべり	牧野 桂一	5	5	5	5		3	23	協会賞
2	5	夜を紡ぐ	平田千代子		3	4	3	5	4	19	準賞
3	9	影は南無阿弥	松廣 李子				4	4	5	13	敢闘賞
4	16	寒夕焼	赤峯 友子	1		1	2	2		6	
5	15	冬がくる前に	白土 正江		1	3		1		5	

第26回 大分県現代俳句協会賞 準賞に平田千代子氏「夜を紡ぐ」 敢闘賞に松廣李子氏「影は南無阿弥陀仏」 牧野 桂一氏「白さるすべり」

第26回大分県現代俳句協会賞には、昨年の十二名を上回る十六名の応募がありました。年間の自作20句を自選し、構成とタイトルを考えて「作品集」としてまとめる作業は大きな労力をともなうものです。応募された十六名に心から敬意を表したいと思います。

今回の協会賞の特徴は、半数の八名が初めての応募であること、さらには十六名中実に十四名が新執行部（平成三十年以降）が掲げた「協会を大きくしよう、協会の影響力を広げよう」の運動の中で入会した会員であるということです。これらの会員は当協会が育てた人材ではありません。

従来、協会賞の意義は会員の優秀作品を顕彰することによって
 ①当協会の日指す俳句の方向性を内外に示すこと、
 ②県協会自身の質的向上（応募者・

選者とも）をはかること、とされてきました。ところが忍び寄る高齢化と会員数の減少、めぼしい俳句作家が減ったとの理由で協会賞を休止したこと（H24～H29の6年間）などがあり、協会の存続が危ぶまれる事態に陥っていました。協会賞を増やす、教育するという手立てを講じずに活動を休止したのです。から組織が弱体化するのは当然です。選者の側面でもそれは顕著で、協会賞再開の21回（H30）当時の協会賞選者8名のうち、現在選者を続けているのは3名に過ぎません。

そこで協会は「協会賞は教育の一環である」ということを強調してきました。協会賞のレベルを下げては本末転倒になりますが、従来のベテラン会員の「腕試し」的な挑戦に加えて、新会員の勉強のためのチャレンジを推奨してきました。思いきって選者の胸を借りることが、多少の

危なっかしさを感じる方がいるかも知れませんが、上達の早道になると思われるからです。未来の協会を担ってくれる人材は毎年の協会賞で勉強しようとする会員の中にいます。

しかし現在は「先人の背中を見て勝手に育つ」という時代ではありません。育てる責任は協会の側にあります。それを見誤ると協会は簡単に潰れてしまいます。そんな瀬戸際にあることを忘れてはならないと思います。

こうした理由から、協会賞の選者のみなさんには選考の際には特に「育てる」という点に心を配っていただくようお願いしています。まだ緒に付いたばかりですが、選考に漏れた作品にもできるだけのアドバイスをいただいています。

さて今回の第26回大分県現代俳句協会賞ですが、大ベテランの牧野桂一さん「白さるすべり」が23点を獲得し、今年の「協会賞」に輝きました。それを追う平田千代子さん「夜を紡ぐ」は19点で「準賞」に終わりました。あと1点で20点に届けば、二人同時受賞も視野に入ったのに残念です。平田さんは現在病氣療養中ですが、回復して再チャレンジできるようにすることを祈りたいと

思います。続いて第三位が松廣李子さんの「影は南無阿弥陀仏」。13点獲得で「敢闘賞」となりました。

今回は一位、二位、三位までで得点が集中しましたので、各賞の決定は比較的スムーズだったと思います。選考委員長である有村王志会長の各賞案に各選者が同意したため、今回も集合して協議することなく受賞者が決定しました。

言うまでもなく現代の俳句は多様であり、考え方の違う系統の俳句を受け入れて自分たちの俳句に活かすというのが現代俳句協会の基本路線です。当協会賞の選者も、それぞれに立場が違います。立場が違うということは「良い俳句」が選者それぞれに違うということです。ですから当然同じ作品でも評価が違うということになります。これは絶対の指導者を持たない、現代俳句の強みです。応募された方は、ご自分で好きなテーマの作品、好きな表記の作品を出していることと思います。そのため指摘されなければ長くその状態が続きます。各選者がそれを是と評価するの可否定するのか、選者の評をよく読み、他の選者と見比べながら自身の俳句観を見直していくことができれば、教育の一環としての協会

賞の役割が果たせるものと思います。惜しくも選に漏れた方を含め、次

第26回大分県現代俳句協会賞・受賞作品

『白濁るべり』

牧野 桂一

十二月八日青炎揺れやます

咳の子にマラカス二つ振れば鳴る

味噌蔵に味噌の香満つる注連の内

起き抜けの看護寒丸の水を飲む

芹薺竹箸のまだみどりなる

笹舟の水面おぼろに過去未来

ふらこの小揺れに余命知らざる

木に登る猫は鳴かずに昭和の日

生も死も戯画の中なり鳥交る

潮の香や四肢ふんばって仔馬立つ

点滴に亀か鳴くとか鳴かぬとか

生死また炎暑に揺るるいろは歌

鳥の巢に混じる針金雷火立つ

防疫の自粛ラムネの玉鳴りす

泉湧く阿蘇全山を従えて

母を焼く白さるすべりさるすべり

死は易し噴水途切れなく昇る

二輪咲く闇の朝顔母の鉢

颯颯に血脈浮かせ流れる星

雁渡る遺影に鸚鵡喋らせて

回の協会賞にたくさんの方が応募してくださることを願っています。

受賞のいよば

牧野 桂一

この度は、第26回大分県現代俳句協会賞に推薦していただきました事に対して心より感謝申し上げます。

本賞につきましては、平成5年第1回の応募作品で次席を頂いたことがありますが、それ以後は協会を離れていた関係もありしばらく応募を中断していました。

授賞式で有村会長より「念願を果たしましたね」と声を掛けていただきましたが、考えてみると本当に二十年来の願を叶えたことになりました。大分県現代俳句協会賞の応募を再

開したきっかけは、大分県現代俳句協会への再加入で、そこで目にした作品のバラエティでした。そこには、それぞれに個性的で独特の世界を表現している自由さがあり、まさに「俳諧自由」を実感させられるものでした。その事が、長く停滞し続けている私の作品に大きな刺激を与え可能性を開いてくれました。そして、皆様方が追求している「自分が本当に表現したい俳句」に出会い、自分もこのような俳句を書いていこうという意欲を掘り起こされ、マンネリ脱出の勇気を与えてくれたのです。

私は、この学び直しのために、事務局長の足立攝さんに、大分県現代俳句協会のこれまで出してきた会報などの資料が欲しいとお願ひしました。送られてきた会報のバックナンバーや通信句会報などで出会う作品は、とても新鮮で、一人一人の生きている生の姿を感じさせてくれるものばかりで、改めて俳句の原点を学ぶことができました。今回の受賞はそのような学び直しの試みが、一定の評価を受けたという意味で、再出発の記念になりました。今後は、皆様方の作品に学びながらより一層自分の俳句の世界を深めていきたいと考えています。



【準賞】「夜を紡ぐ」

平田千代子

マスクした目も燃えているとんどの火の番の音遠く聞く終い風呂
まったりと液化してゆく冬の猫
涅槃西風險の重い阿蘇五岳
桜見る黄泉比良坂そのふもと

暮れ残る田の青鷺とソクラテス
梧桐がまひるのような息を吐く
赤き灯の誰が思い出や肉桂水
玉虫の死より永遠はじまれり
ひたすらに夜を紡げり黄金虫
放課後の空を吐き出す赤とんぼ
地球儀が孵化を始める熱帯夜
燃え残る夢にもちやんと水を打つ
たましいが夜を膨らまず祭酒
蟬蛸や太陽はもう鯨色
青空をぼろぼろこぼす百日紅
ふくろうが仮面のままの顔で鳴く
蒲の穂の揺れてかすかな偏頭痛
山眠るコペルニクスのでのひらで
コスモスのふざけて揺れたあとの黙

【敢闘賞】「影は南無阿弥陀仏」

松廣 李子

陽炎を萱草色に立つ死人
春雨やひたととなふる南無阿弥陀仏
三叉路を風にまかせて蝶の影
薔薇真白からだに管を入れる朝
利き足は義足夏の海を蹴る
菊月夜あはす母の手透きとほる

第26回大分県現代俳句協会賞・各選考委員選評

六人の選考委員から事務局に届いた選考結果と選評を発表します。選考の際は作者名は伏せてありますので、左記掲載の選評中にある作者名は、あとから事務局で書き加えたものです。

日常の心身からの発句 河野 輝暉

今回16名の方々が応募された。譬えは好くないが、ウクライナやガザでの戦のみが挑戦ではない。俳句界でこれだけ多くの仲間の詩的挑戦に敬意を表します。

句材爛漫といった感だ。決してテーマがばらついてはいずに、むしろ波瀾万丈を特色としている様だ。

もし日記の文にこんな诗情豊かな綴りがあったら楽しく読んでみたい、と言うのが全句の感想である。いかにふとした日常をポエジー化しているかと親愛の句が多い。

一位 白さるすべり 牧野桂一 五点
全般として、日常の心身から発句している。技巧は当然あるが、謙虚さが根底にあつての上の情趣が勝っている。

空瓶に芒一本夜風あり
ボジョレヌーボー味方はパンシロン
月まででは行けないけれど月を呑む
薔薇百本息が止まるの酔うほどに
奔放な酒賛歌に、定形に固まらない冒険の意図と好意にとる。さしずめ演歌の作詞もする俳界の吉幾三か。

五位 冬が来る前に 白土正江 一点
優秀な兵隊は居るのだが、数不足と例えれば分り易いだろう。次は珠玉の様な好吟。

・ 芹薺竹箸のまだみどりなる
・ ふらこの小揺れに余命知らざる
・ 防疫の自粛フムネの玉鳴らす
・ 二輪咲く闇の朝顔母の鉢
タイトルとなった一句は胸を打つ。

三位 夜を紡ぐ 平田千代子 二点
全句に品格の高い個性があり詩情がある。いろんな角度に目配りがある。やや概念的な句も三句あつたが、精進の、のり代が期待される。

全作品に触れるには紙幅が尽き残念であるが、俳句を百読千読して流されず、個性を確立して精進下さ。い。俳句は排苦、百楽の長ですから。なお、採らなかつた方々には、自己模範例句として受賞にも値する堂々

・ 母を焼く白さるすべりさるすべり
この句のリフレインが汲めども尽きぬ慕情を奏でていて美しい句姿だ。

・ 梧桐がまひるのような息を吐く
・ 玉虫の死より永遠はじまれり
・ 山眠るコペルニクスのでのひらで

二位 酔うほどに 藤万葉 四点

四位 怠い沈黙 陣野千恵子 一点

の一句ずつを応募順で選びました。

「生きる支えの俳句」 (大神愛子)

・浴衣着た二人の孫の色香見ゆ

「森羅万象」 (佐々木玉)

・こだわりを捨てて一から冬木立

「凍鶴」 (幸谷恵子)

・虫の音や苦も楽も無く一日終ゆ

「美しい村」 (桐野力)

・この腕も農具のひとつ秋終ひ

「影は南無阿弥陀仏」 (松廣季子)

・わたくしに馬のなごりや春の泥

「嘆して」 (生野義晴)

・嘆してわが虚栄心少し崩る

「実むらさき」 (川西達子)

・霧の中すくそこという遠さかな

「歳月」 (有永真理子)

・白菊になるかもしれぬ母がいる

「晩節」 (高橋玲子)

・野仏に笑み返されて暖かし

「木の国」 (石橋紀公子)

・冬うらら森を背負いしスクワット

「寒夕焼」 (赤峯友子)

・梅硬し手を合わすれば神となる

一位に「白さるすべり」 有村 王志

選考に当たって、まず作者の立ち位置、形象力、語彙とその展開力等を参考に各人から五句を選んだ結果、次の順位とした。

一位には白さるすべり (牧野桂一)

配点は五点

・芹薺竹箸のまだみどりなる

・ふらこの小揺れに余命知らさるる

・生も死も戯画の中なり鳥交る

・点滴に亀が鳴くとか鳴かぬとか

・母を焼く白さるすべりさるすべり

二位に晩節 (高橋玲子)、四点

・人はみな生死を背負う蜃気楼

・寒明けの煮豆くつくつ笑いだす
・桜咲くさりとひとつつ年をとる
・大夕焼明日に予定のない安堵
・独り居にいつしか友となる金魚

三位に凍鶴 (幸谷恵子)、三点

・凍鶴やバベルの塔は未完成

・三・一 記憶の底にある灯り

・さあ出発アサギマダラの夢の旅

・昂れる吾も夏野の一人なり

・虫の音や苦も楽も無く一日終ゆ

四位に歳月 (有永真理子)、二点

・誰もみなほどよき間なり花巡り

・水打って一息分の風が立つ

・ありていの日常があり胡瓜もむ

・鶴折りても折りても足りぬ八月よ

・白菊になるかもしれぬ母がいる

五位に寒夕焼 (赤峯友子) 一点

・大きな唇を舐みだしている風船かすら

息づかいが説得力に

河野 則子

一位 夜を紡ぐ (平田千代子) 五点

日常の姿や常識を見事に反転させている。読むものにとつてこの静と動、生と死などの句は楽しい驚きをもたせてくれた。例えば

・玉虫の死より永遠はじまれり

・青空をぼるぼるこぼす百日紅

・放課後の空を吐き出す赤トンボ

など一種の逆説の面白さがある。それでいて字余りの破調がなく全句の下五が行儀よく名詞止めで力強く締めている。大切なことは作者自身の日常体験から離れてなく、それを折り込んでいる。息づかいにより説得力を得ている。

二位 影は南無阿弥陀仏 (松廣季子) 四点

この現世と彼岸とを往来する句群は特異である。例えば

・霊と蜘蛛の棲みつく賽銭箱

・春雨やひたしとななる南無阿弥陀仏

・梵鐘がおおきな夏をつつみこむ
・青柿のこつんと落ちて自尊心
・けもの目で寒い土壇を歩いて来た
・陽炎をゆけばどこかに父がいる

・石仏が居眠りしてるほらコスモス

・産土は記憶の外に鳥雲に

など。豊富な語彙が生み出す情感が読者を飽きさせない。上品さの中に実体験が根底にあり、十真さとユーモアにより鑑賞者の広い共感と呼んでやまないだろう。

三位 嘆して (生野義晴) 二点
嘆と咳はどう違うのか。「咳をし

ても一人」の名句を想い出す。前者は生理現象で、人前でも思わず出てしまう。だが後者は威張ってエヘンのつもりの場合もあり、同時に人の意見に賛同しないのか中立かを当り障りなく暗示するつもりで出すのが咳と言えよう。この違いを見事に対比させた二句が

・嘆してわが虚栄心少し崩る

・なす術のなきが如くに咳をする
にはつきり現われている。

四位 寒夕焼 (赤峯友子) 一点

秀作二句を示す。

- ・梅硬し手を合わすれば神となる
- ・青柿のこつんと落ちて自尊心

五位 冬が来る前に (百土正江) 一点

同じく秀作二句を。

- ・恋蜜肩のあたりが生臭い
- ・障子貼る二人の影も老いてゆく

作者の心の世界に引き込まれる 上田たかし

一位 白さるすべり (牧野桂二) 五点

全体を通じてよく吟味されており、

内容の濃い句となつてゐる。対象物を通じて、作者の意図する考えが読者にもよく伝つて来る。むつかしい文字はないけれど、読み返す度に作者の心の世界に引き込まれていく気がする。注目すべき句として

- ・十二月八日青炎揺れやまず
- ・笹舟の水面おぼろに過去未来
- ・生も死も戯画の中なり鳥交る
- ・母を焼く白さるすべりさるすべり
- ・死は易し噴水途切れなく昇る

二位 夜を紡ぐ (平田千代子) 四点

どの句からも作者の考え方がよく伝つて来る。いろんな角度に繊細な感覚を持つて対応している。四季の移ろいに対する深い洞察力が伝わつて来て好感が持てる。

- ・ひたすらに夜を紡げり黄金虫
- ・放課後の空を吐き出す赤とんぼ
- ・地球儀が孵化を始める執帯夜

・青空をぼろぼろこぼす百日紅

・山眠るコペルニクスのでのひらで

三位 冬が来る前に (百土正江) 三点

戦争への不安が句中に潜んでいて、人々に争う愚かさを書いてゐる。安楽な生活に浸つてゐる現代人への警鐘にもなつてゐる。

- ・福寿草そのぬくもりの一行詩
- ・ミサイルやいくたび越える春の海
- ・逆上がりの少年が抱く鰭雲
- ・除夜の鐘に軍靴のひびき混じりおり

四位 怠い沈黙 (陣野千恵子) 一点

どの句からも内容の濃いものが伝つて来る。平易な文体の外に明るい未来があるようで気持ちがよい。

- ・アクセルを踏んでとびこむ春の闇
- ・キスまでの怠い沈黙夏木立
- ・朝顔が野生の顔をして笑う
- ・三陸のなみだの海に翩群る

五位 寒夕焼 (赤峯友子) 一点

平易な言葉遣いではあるが、説得力のある句が並んでゐる。句の中に

広がる景色は、読者に快よく残つており、作者のやさしさが伝つて来る。次の句が心に残つた。

- ・さくらさくら言葉にならぬ真昼時
- ・梵鐘が大きな夏をつつみこむ
- ・青柿のこつんと落ちて自尊心

以下は、応募順に惜しくも今回の選外になつた作品について。

「生きる支えの俳句」 (大神愛子)

自分の気持ちを素直に述べることは大切であるが、不要な「ことば」は避けた方がよい。「夏の夕宵待草を口ずさむ」は「口ずさむ宵待草や夏の夜」のように上五を下五に置き換えることもできる。「好物のお赤飯供え夫への愛」には季語がない。また好物を供えるのに「愛」は余計。「好物の夫の赤飯盃蘭盆会」こう書くだけで供えが不要になる。

「恩師逝く十八才の片思い泡と消ゆ」この作品にも季語がなく饒舌すぎる。「十八の恋の恩師が逝く枯野」のように十七文字にまとめることが大切。意識すれば、意欲が出てすぐ

文体が身に付くし、意識しなければ永久に直らない。

「酔うほどに」 (藤万葉)

作句の取り組みに意欲が見られる。軽い文体に好感が持てる。いろんな体験が句に生きてゐるのが、今後の期待である。「12時」はやはり「十二時」と書くべきだろう。次の句には惹かれた。

- ・ため息は夜明けの色の酔芙蓉
- ・言い足りぬ言葉呑みこみ雪見酒

「森羅万象」 (佐々木玉)

作者の意図するところがよく分かってゐる。自分の体験を通して一句に仕上げている努力には感動する。全体的に秀句が並ぶが、若干句にバラツキがあるのが惜しまれる。わずかな差が致命傷になるので注意。

「凍蝶」 (幸谷恵子)

やさしい表記で読者に感銘を与え、多くの好感が持てる。内容も豊富である。特に次の句に惹かれた。

- ・三・二一記憶の底にある灯り
- ・何から話そう友の瞳に新樹光
- ・足音が近づいて来る沖禪忌

「美しい村」 (桐野力)

やさしい文体で村の四季を上手に詠まれている。手練の方だろう。作

者の地元愛の強さが、どの句からも読み取れる。この意欲に期待する。

「影は南無阿弥陀仏」(松廣李子)

視点の広い作者である。いろんな場面での体験が活きた句となつて、読者に迫つて来る。実力は十分。今回は惜しくも選外としたが、今後に期待したい。

「噓して」(生野義晴)

やさしい表記を心掛けているようなのに妙に固いところがある。「噓してわが虚栄心少し崩る」は「わが」を取つて「虚栄心少し崩して大噓」としてはどうだろうか。自作を少し見直すと大きな進歩がありそう。

「美むらさき」(川西達子)

せつかくの感受性が生かされていないところがある。「逝きし師を悼んでおりぬ冬桜」の悼とは、人の死を悲しみ嘆くもので、逝きしが重複。「師を悼む墓碑に囁く冬桜」のように対象と距離をとる方が情感が増す。

「歳月」(有永真理子)

日常生活を句として上手に詠んでいる。「鶴折りても折りても足らぬ八月よ」には惹かれたが、何度か前

に見た気がした。今目的な魅力がある作者。今後の多作が鍵になる。

「晩節」(高橋玲子)

天衣無縫な好感が持てる作風があるのに「晩節という尊きもの」「悔しさも生きる力」のような安易な「解答」が気になる。せつかくの良

研ぎ澄まされた詩精神 伊藤 利恵

一位 白さるすべり(牧野桂二) 五点

母親の看取り(たぶん自宅での)の日々の中で研ぎ澄まされてゆく作者の詩精神がまぶしい、構成力の光る一篇であった。

- ・ 芹齋竹箸のまだみどりなる
- ・ ふうこの小揺れに余命知らざる
- ・ 生も死も戯画の中なり鳥交る
- ・ 鳥の巢に混じる針金雷火立つ
- ・ 防疫の自粛フムネの玉鳴らす

句の姿は静かで、日常を何度も漉して俳句の言葉を紡いでいるような、教ええられる事の多い句群であった。好きな句を挙げればきりがながい、やはりタイトルとした、

- ・ 母を焼く白さるすべりさるすべりに最も興味を引かれた。「白さるすべりさるすべり」の繰返しは、オノマトへの役割も担い、白い炎や骨や

い句群の邪魔をしてしまう。

「木の国」(石橋紀公子)

やさしい表現に努力されている。「夏蝶の目線で辿る母の町」「やすらぎの形に果てる栗の花」のレベルに作品を揃えることは、この作者には難しくはないはず。まずはそこから。

伊藤 利恵

灰を連想させる。この幻想的な表現をもつて、かけがえのない人を焼く

時間の底の無い悲しみを、充分に他者に伝えきれていると思う。
・ 顛顛に血脈浮かせ流れ星
こめかみと流れ星の取り合わせは初見であり、私にはたいへん斬新に思え、こころの騒ぐ一句であった。

一位 影は南無阿弥陀仏(秋篠孝子) 四点
特異なタイトルである。浄土宗のご法事で聞く法然の「月影のいたらぬ里はなけれども…」を思わせる。

- ・ 雨音のやはらかきまま雛祭
- ・ わたくしに馬のなごりや春の泥
- ・ 旧かなのやわらかさを活かした自在な展開に惹かれ読み進むと、
- ・ 薔薇真白からだに管を入れる朝
- ・ 半夏生検査廊下の庭しづか

と、なにか大病をされたご様子。それでも詠みぶりは羨わらず美しく、韻律への反射神経は天性のものなのだろう。

・ 利き足は義足夏の海を蹴る
・ 河童忌や咽を甘みの漢方薬
・ 石仏が居眠りしてはらコスモス
・ 放射状に割れた手鏡雛祭忌
まるで吐く息吸う息に句がこぼれるような、格闘のあとなど微塵も見せない滑らかさである。また

- ・ 陽炎を萱草色に立つ死人
- ・ かはほりは紅下黒のほひする
- ・ 狼の春や吐息は似紫

等、和の色彩をとどこどころに配し(作者は春色をされるのだろうか)、読ませる一篇となっている。

三位 夜を紡ぐ(平田千代子) 三点
涅槃西風險の重い阿蘇五岳
・ 桜見る黄泉比良坂そのふもと
・ 暮れ残る田の青鷺とソクラテス
前半に印象的な句が並ぶ。特に「暮れ残る」の句は、中七までの常套的展開が結句の「ソクラテス」で一息にシュールな作品となり、みごと

とな手際である。一句一句それぞれに作者なりの工夫があり、丁寧な作句姿勢を感じた。

ひとつ気になったのは「放課後の

ひとつ気になったのは「放課後の

空を吐き出す赤とんぼ」「地球儀が
孵化を始める熱帯夜」「ふくろうが
仮面のままの顔で鳴く」の傍線の部
分である。主観に寄りすぎているよ
うに感じたがどうか。俳句は
一行詩でもあるが、詩の一行ではな
いということに再考していただけれ
ば、さらに光る作品になると思う。

四位 寒夕焼(赤峯友子) 一点

・けもの目で寒い土墳を歩いて来た
今回の応募作品の中では少し異色
の句である。手掛かりが少ないので
読み手の数だけ解釈があるだろう。

「寒い古墳」とは何だろうか。荒れ
果て、或いは保存整備の行き届いた
いずれにしても、かつての権力者の
権力の残滓が執念く風化できずにい
るような、そんな古墳のことを思っ
た。それをかぎ分け目に刻むのは、
ヒトの内なるけもの領分かもしれ
ない。更に「歩いて来た」とあるの
は、そこを通過する自分もまた瞬き
の内に「過去」になるのだと、その
ような句意であろうか。山頭火や放
哉を思わせ、懐かしい句柄であった。
他に、

- ・麦の目がきちきち光る奥豊後
- ・葉牡丹の渦がゆるんでゆく忌明け
- ・陽炎をゆけばどこかに父がいる

等の佳句も揃えている。ただこれ
らを全て後半部に置いたことが何と
も惜しまれる。「梅硬し手を合わす
れば神となる」「探梅のしんがり
ゆき亡母」といる。「さくらさくら言
葉にならぬ真昼時」、等々まだ推敲
の余地がある句を冒頭に据えてあり、
一篇の与える印象を弱くしているよ
うに思う。次回は(ぜひ次回も)応
募を!、「構成」の面にも力を発
揮してほしい。

五位 実むらさき(川西達子) 一点

- ・めぐり来てまた藤房のゆれのち
- ・衿立てて梅見の坂を幾曲り
- ・父がいて母がいた日や梅二月
- ・永遠の愛とう鶏頭仏花とす

生と死の狭間を見つめる 中山 宙虫

一位 影は南無阿弥陀仏(松麩幸子) 五点

モノクロに近い色合いの世界が中
心となって説得力を感じる。病の影
を忍ばせながら心情を描き出す。水
や光が静かに二十句に散りばめられ
ていて、生と死の狭間を見つめる世
界がリアルである。

タイトルもユニークであるが、
「影は南無阿弥陀仏」よりも「南無
阿弥陀仏の影」とした方がより伝わ

てらいたくない詠みぶりが心地よく、
境涯を振り返りつつ今日の一步を踏
み出すような、亡き人たちの暮らし
の記憶に作者の一日を重ねるような、
生活のすがしさが一篇を貫いている。
・黄砂降る納税通知投げ込ま
るの諧謔はとくに目を引いた。この
ような句があといくつかあると全体
がまた引き締まると思う。次回に期
待したい。

今回は、それぞれの作者の個性が

感じられる応募作品が多かった。こ
れはよい傾向と思う。自分の書きた
い俳句を、時流に流されず書き続け
ていくことが大切だと改めて思わせ
てもらった。

・春雨やひたにとどまる南無阿弥陀仏

- ・わたくしに馬のなごりや春の泥
- ・本音また漏るる寝言や熱帯夜
- ・利き足は義足夏の海を蹴る
- ・石仏が居眠りしてるほらコスモス

二位 夜を紡ぐ(平田千代子) 四点

題材の取り合わせの妙が魅力的。
口語調の無理のない文体で思わぬ世

界へと導く。ちよつとした快感があ
る。冒頭の四句に不満が残るのが残
念。

- ・青桐がまひるのような息を吐く
- ・地球儀が孵化を始める熱帯夜
- ・燃え残る夢にもちゃんと水を打つ
- ・蟬蛻や太陽はもう鯨色
- ・蒲の穂の揺れてかすかな偏頭痛

三位 白さるすべり(牧野桂二) 三点

身近なものに焦点を当て、表現に
力みや無理がない。素直に入り込ん
でくる二十句だった。母を見送るま
でを日常のなかに描くストーリー性
も良い。光や温度などを皮膚で感じ
る事ができた。

- ・芹薺竹箸のまだみどりなる
- ・笹舟の水面おぼろに過去未来
- ・木に登る猫は鳴かずと昭和の日
- ・点滴に亀が鳴くとか鳴かぬとか
- ・雁渡る遺影に鸚鵡喋らせて

四位 森羅万象(佐々木玉) 一点

無理のない表現が魅力。そんなり
と読み進むことができた。どこかで
見た句が散見するのが惜しい。独自
の目線での世界も欲しいところ。

- ・摩崖仏欠けた口元油照り
- ・雨上がりためらいがちの小望月

・のり代の少し剥がれて春きざす

五位美しい村(桐野 力) 一点

穏やかな情感が伝わる。文体もあるが、題材に依るところも大きい。もう一步深い心象風景を見せてほしいと思う。

・春の野を焼いて主の座を譲る
・穂を噛んで実りの秋を確かむる
・この腕も農具のひとつ秋終ひ

その他、選外の作品についても応募順に簡単にコメントします。

「生きる支えの俳句」(大神愛子)
季重なりが多い。歳時記を今一度、エッセーとの違いを意識して。

「酔うほどに」(藤万葉)

飄々とした感覚が楽しい。この感覚に心情を深くできたらと思う。

「凍鶴」(幸谷恵子)

意表を衝く展開の句もある一方、平板な句も多い。底上げが課題。

「怠い沈黙」(陣野千恵子)

現代語を積極的に持ち込む姿勢に好感。もっと深い内容の句もみたい。

「噓して」(生野義晴)

しっかりとした景を持ち込んで説得力。やや回りくどい表記が多い。

「実むらさき」(川西達子)

情感は伝わる。独自の世界観を見せてほしい。もう一步の踏み込みを。

「歲月」(有永真理子)

第27回大分県現代俳句協会賞Ⅱ作品募集Ⅱ

大分県現代俳句協会賞は、当協会が一番権威のある賞であると同時に当協会の目指す俳句の方向性を協会の内外に示すものです。

この賞の意義は、単に応募者の実力試しの場であるというだけでなく、協会内での俳句研鑽の気運を高めることにあります。とりわけ平成30年の28回総会以来、県協会あげての会員拡大運動が始まり、新会員の比率がすでに半数以上に高まっています。協会の質的向上、幹部の養成という課題は最優先のものです。

一流の選者に自作の20句を丁寧に見てもらえるチャンスはそんなにあることではありません。応募すること自体が俳句の勉強です。

題材及び視点にはつとせられる。季語の核となる句の存在が欲しい。

「晩節」(高橋玲子)

無理なく読める作風だが、季語の予定調和感が少し物足りない。

「木の国」(石橋紀公子)

やや平凡な句が目立つ。結果的に

季語の説明のものがある。展開を。

「冬が来る前に」(白土正江)

選からは洩れたが、好感触を持った。心象風景が見える句がやや不足。

「寒夕焼」(赤峯友子)

ゆるやかな文体が個性的で面白いが、間延びした感が強い。あと一步。

ベテランの方も新人の方も、俳句上達の最も確かな方法の一つに協会賞があるということをしつかりと位置つけてほしいと願っています。

Ⅱ応募要項Ⅱ

◆応募資格…県協会員であること(同賞受賞者は除く)

◆作品…20句一組(一人一編)。タイトルを付加すること。おおむね令和5年11月〜令和6年10月の作品。

(既発表、未発表は問わない)

◆応募用紙…横方向縦書きのA4原稿用紙使用のこと(ワープロもこれに準ずる)。誰でも読める字で書き、右の欄外にタイトル、左の欄外に氏名(番号)を明記する。

◆締切…10月末日(消印有効)

◆応募料…2千円・作品に同封する。

◆送り先…事務局 足立宛て

◆選考委員…河野輝暉、有村王志(選考委員長)、上田たかし、河野則子、伊藤利恵、中山宙虫

◆注意事項…①作品は一句一句の出来映えの他に、20句一組のタイトルを含んだ完成度も選考の対象になります ②応募後の訂正には応じられません。返却はしないので、必要ならコピーを取ってください ③公平を期すために作者名を伏せ、活字化して選者に渡します。難読・癖字が原因の誤読は応募者の責任とします ④多少の融通は利きますので、あきらめずにご相談ください

10月12日（土）川添吟行俳句大会

会場：川添公民館（川添小学校となり）

時間：投句締切12時30分・それまでに吟行、昼食を

大野川流域でゆつたりとした秋日和を満喫しましょう

大成功のうちに幕を閉じた昨年の「九重吟行俳句大会」につづき、今年は大分市の川添地区で「第21回大分県現代俳句協会吟行俳句大会」を開催します。

会場は川添校区公民館（川添公民館）。地域文化の発信基地として活発な活動を行っています。大分市から国道197号線を坂ノ市方面へ進み、鶴崎橋を渡った直後の信号を右折。県道21号線を4キロほど直進すると左手に川添小学校があります。その隣が今回の会場となる川添公民館です。

吟行場所は川添公民館近辺。すぐ前に大野川の下流が広がり、海側（北）を望めば臨海工業地帯の煙突が並んでいます。反対側（南）に目を転じれば高速道路の高架が走り、宮河内ICまでわずかな距離です。山手（東）にはこの地域のシンボルともいべき九六位山



川添公民館玄関

がそびえています。豊かな自然に囲まれながら、同時に「現代」の息吹も感じられる、そんな吟行場所になります。

川添公民館では大分現俳協成清正之会長（当時）が開いた川添公民館俳句教室が、成清講師が亡くなったあとも継続して今年9月で16年目を迎えます。その責任者の赤峯友子さんを中心に俳句教室のメンバーが今回の吟行大会の実行委員会を構成して、みなさんのお世話をしてくれれます。参加費は無料です。

Ⅱ実施要項Ⅱ

10月12日（土）小雨決行・雨天中止
会場：川添公民館（無料駐車場あり）
大分市大字宮河内4547の1

電話097（529）2388

吟行場所・川添公民館を中心に、大野川流域。自然や、自然と人間の関わり、そこで暮らす人々の生活などをテーマに自由に詠んでください。

※会員、非会員の関係なく誰でも参加できます。

※ひとり二句出し（投句用紙は川添公民館の受付に用意しています）

※投句締切12時30分（投句は10時から受けつけますので早めの投句をお願いします。投句箱は公民館受付にあります）

※13時から吟行大会（勉強会）を開会します。時間を厳守してください。

※吟行前に集合はしません。自由に吟行し、各自昼食を摂ってください。

※公民館は9時半から使えますので荷物を置いたり、トイレを利用したりできます。飲食も可能です。

※近くに食堂等がありませんので必要な方は弁当をご持参ください。

「私と俳句」 生野 義晴

● 川添俳句教室との出会い

「川添俳句教室」の存在を知ったことが、俳句に向き合う実質的なスタートでした。講師をされていたのは成清正之先生。この世界で大御所と目されている方だとは、その時はいささかも知りませんでした。

しばらくして先生は句歴七十年以上であること、そして数々の受賞歴があり、全国に熱烈なファンがいることを知りました。先生は創作意欲



が聊かも衰えることなく、意気軒昂に俳句に取り組んでいることを知って感動しました。

俳句教室で学ぶ以上は、上手くなりたい、秀句を詠みたいという願望は私にも当然あります。教室に通って、成清先生は私の一生涯を懸けるにふさわしい先生であると確信しました。その思いは先生が亡くなった今でも変わりません。

● 俳句への関心がよみがえる

私をはじめ俳句に関心を持ったのは、小学校の国語の授業でした。こんなに短い形式であるのに、小説や戯曲などと同じように一つの独立した文学であるということにとっても惹かれました。しかしその頃は漢字が大好きで、得意科目の一つだったので、その延長線上で俳句を見ていただけなのかも知れません。

その後俳句への関心も自然な形で風化していましたが、TVバラエティの「プレバト!」のやり取りを見ていて、あの頃の感覚が再燃しました。

ちょうど退職後の余暇のあり方を考えていた時と重なりました。

しかし俳句を学びたいと思っても、どこでどうしたら学べるのか皆目見当が付きません。そのとき偶然にも川添公民館俳句教室の生徒募集のチラシが目に入ったのです。思いきって電話をして、受講者のひとりに加えてもらいました。

先生の講義は情熱的でしたがとても具体的で、一人一人の個性を大事にしたものでした。それで個性も性格も違う教室生が先生を慕っていたのだと思います。

● 大器晩成との言葉をほげみに

私は若いときから文学には関心があり、文章を書くことは大好きだったのですが、どういうわけか詩情を表現することは苦手でした。その傾向を先生はすぐに見抜き、私に助言してくれたことがあります。

「あなたの作品は川柳に近い。俳句の面白さと川柳の面白さは違います。時間をかけて詩性を表現する方法を学びましょう。そのためには自分の欠点を常に自覚して多作多捨を心がけてください」

句作に行き詰まるたび、私はこの言葉を反復します。そして「あなた

は大器晩成型なので、あせらずに進みましょう」という先生の言葉に励まされています。

● 独学では効率が悪すぎる

俳句という文芸は、独習は無理ではないとしても、恐ろしく効率が悪いということも知りました。前にも書きましたが私は漢字が好きなので、ついつい自分の作品に難しい表現を使ってしまう。ところが成清先生の指導の中心部分は「複雑な現代の心情を、誰でも分かる平易なことばで書く」という点にあります。難しく書いてしまうという自分の悪い癖を克服する上で、最上の先生に巡りあつたことに感謝しています。

私が自信を持って書いた言葉が、他の教室生には全く理解されなかったり、逆に書いている私がいかに良いたと思わなかった表現が、なぜかみんなの共感を得たりすることがたくさんありました。こんなことを通じながら、多くの人に伝える書き方の技術が深まっています。自分一人だけの試行錯誤でこれをやろうとすると何十年かかるか分かりません。思いきってみんなの前に作品を晒す重要性が私にも少しづつですが分かってきました。

●成清先生の情熱を受け継ぐ

先生が亡くなってから一年半が過ぎました。95歳で亡くなるその年まで、先生は川添俳句教室に足を運び授業を続けました。いま思えばさぞかし苦しかったことだろうと想像しますが、その時は先生の気迫で教室

には熱気があふれていました。先生の教えと俳句への情熱は、そのまま川添俳句教室に受け継がれています。教室の仲間や先輩諸氏の一人一人が、自由闊達な意見を出し合い、切磋琢磨にして先生の教えを現しようとする努力をしています。私自身も「それでは己の俳句は上達してい

るか」と問われれば、歩みの遅い亀よろしく首をすぼめるしかありません。しかし「上達への意欲はあるか」と問われれば、即答で「あります」と断言できます。いつの日か、諸先輩のように作品が自由に詠めるようになりたいと、今日も模索を続けています。(了)

大分県現代俳句協会 自薦作品 結果発表

秋灯をガザの祈りが埋めてゆく

〈26点〉 足立 撮影

母泣かすはずじゃなかった枇杷の花

〈15点〉 足立 町子

村痩せて落葉が騒ぐ通学路

〈15点〉 上田たかし

鰯焼く戦火に引火せぬように

〈14点〉 吉田 素子

秋の季語あふれつまづく赤い靴 甲斐加代子

〈9点句〉

痩せた手で九月の痩せた蚊を叩く 神 慶子

燃えるものみな美しき神楽月 足立 撮影

空蟬や未来へ向う置き手紙 本田 圭子

日だまりを出でて帰らぬ冬の蝶 時松由美子

〈8点句〉

憂きことのない顔をしてレモンテイ 立花真由美

蚯蚓鳴くたまにはお血洗つてよ 桐野 力

こだわりの湯呑み一服秋を飲む 永松左世美

山の端に帰りそこねし白い満月 赤峰佐代子

〈7点句〉

内視鏡するりと師走まで伸びる 足立 撮影

LINE打つ指に冬日を少し足す 足立 撮影

村にまだやさしさ残る木守柿 下司 正昭

収穫の大根など煮て足る暮らし 立花真由美

〈13点句〉

トマト挽く赤信号の色だけど 河野 輝暉

祭果てみんな出てゆく無人駅 有村 王志

〈12点句〉

針穴を覗けば郷の春祭り 菅 撮影

先生はいつも普段着夜学の灯 牧野 桂一

〈11点句〉

迎え加子を下手と亡き子に褒めらるる 河野 輝暉

綿菓子のような告白冬に入る 鎌倉真由美

〈10点句〉

一歩ずつ晩年の貌落葉踏む 有村 王志

今だから言える身の上式部の実

足立 町子

大夕焼明日に予定のない安堵

高橋 玲子

おみなえし私を知らぬ母がいる

石橋紀公子

みどり児を抱く眼差し合歓の花

志賀 文子

飢えもなく争もなく昼寝かな

福井トミ子

ひとすくい太古の味や寒の水

大村 和代

《6点句》

穂苜やみんな素直なフリをする

陣野千恵子

てのひらは無言無想の寒露かな

有村 王志

抜け殻になって落葉の中にいる

本田 圭子

父とゆく十一月の遠い海

足立 町子

墨の香の筆にのこれる秋思かな

河野 則子

歳月の重み分け合う大銀杏

甲斐加代子

紅葉に吞まれ平和の水を飲む

甲斐加代子

稲埃吸って農婦の腰豊か

鎌倉真由美

立冬の村は能面老いてゆく

上田たかし

来年十月九州現代俳句大会は大分が当番県

一年に一度の「九州現代俳句大会」が、来年大分で開催されます。主催は九州現代俳句連合会ですが、当番県にあたる当協会が運営から引継ぎまで全面的に責任を負います。

今年の6月15日、県在住の本部会員と県協会の役員がコンパルホールに集まり、「第15回現代俳句大会in大分」の結成大会を行い、以下の項目を確認決定しました。会員のみなさんのご協力をお願いします。

- ・実行委員会会長は有村王志会長
- ・同事務局長は足立攝幹事長
- ・その他の役員は当協会役員が兼任
- ・大会日程は10月19日頃（未定）
- ・会場は大分ホルトホール（未定）
- ・当協会の第35回現代俳句大会は単独で行わず九州大会と合同開催
- ・黒字を出すために一五〇〇句以上の投句を目標にする
- ・従来行われていた前日の懇親会は行わない。宿泊の斡旋もしない



熊本県現代俳句協会副会長の（当協会元副幹事長、現協会賞選考）の中山宙虫氏が代表を務める罪罪IIの14号（春号）、15号（夏号）が発行されました。なお本誌の紹介から洩れていた12号（昨秋号）も一緒に紹介いたします。頒布価格は今年から一冊一二〇〇円です。

星永文夫氏の「罪罪」の後継誌としてスタートしているので、随所に星永氏のリスペクトがあるが、中山宙虫氏の代表としての指導性も揺るぎないものになっている。会員の自選句のほか選評、エッセー、添削などの俳句指導、俳句に対する読み物等、面白く読み応えがあるも

のになっている。お問い合わせは事務局足立まで。

蝉声の乱れ縄文人眠る

牡蠣を焼く町に荒ぶる波頭

父の求めた土だと思ふ花虎杖

（宙虫氏作・編集部抄出）



当協会の横山康夫氏らが編集する俳誌「周」の第8号。本年3月の発行で、昨年七月山形県米沢市を旅行中に亡くなった澤好摩氏の追悼特集号。俳人澤好摩氏との各人各様の想い出は、公式には知られていないエピソードがたくさんあって、とても興味深いものだった。

会員のひとり十句の自選作品はレベルが高く意欲的である。

「周」についての問い合わせは、協会事務局まで。

鬼無里にはまだ半鐘が鳴っている

影鳥海沖に好摩の高き聲

子とわれと顔を見あはせ瓢の笛

（横山氏作・編集部抄出）

《入会・歓迎》

清未ヤヨイ(国東)
しじみ蝶風^もにふかれて逃避行
時松 千城(九重)
万緑や殺^{ころ}止まぬ水の星
豊國 隆信(玖珠)
行く雲や羊を追った夏帽子
竹石 末子(九重)
亡き夫を恋ふる日のあり牡丹の芽
安部スエノ(九重)
温陽より孫抱く嫁や福寿草

第二回 雑詠句会作品募集

- ◇会員なら誰でも参加できます。当協会の日常活動なので無料。
- ◇当季雑詠で当協会未発表のものを3句送ってください。
- ◇締切は九月十三日。第一回雑詠句会の選句締切と同じです。
- ◇同封のFAX用紙を利用して、お近くのコンビニから送れば便利です。50円で送れます。
- ◇ハガキ、メール等でお送りください。さつてもかまいません。読めさえすれば方法は問いません。
- ◇宛先は事務局足立まで。
- ◇作品は自動的に年間一句賞の対象になります。
- ◇詳しくは句会報25号を。

高野小百合(天分)
凍^こて付いた空に鴉^{カラス}がぶつかった
佐藤 優美(天分)
汚染魚の行く宛もなき無月かな
後藤 茂(天分)
羽子板の音もかるやか雪の庭
薬師寺裕一(天分)
亡き母のものの滅りゆく立夏かな
仲村 成美(兵庫)
夏しぐれ嫁は遊びに猫と居る

《退会》

- 田中 充(1月1日付)
- 進藤 久子(1月1日付)
- かみのみずほ(2月1日付)
- 岩崎 芳子(2月1日付)
- 朝賀みどり(2月1日付)
- 万葉 太郎(3月1日付)
- 田口十糸子(3月1日付)
- 三橋 光枝(3月28日付)
- 《発展基金協力者・一口千円》
- 赤峯佐代子……………二口
- 足立 町子……………三口
- 有村 王志……………三口
- 安藤 セツ……………三口
- 井上 則子……………二口
- 上田たかし……………八口
- 大神 愛子……………三口
- 小野みち子……………一口

- 甲斐加代子……………三口
 - 甲斐 素純……………二口
 - 加藤 征孝……………三口
 - 鎌倉真由美……………三口
 - 古後 粒勝……………二口
 - 倉迫 順子……………三口
 - 神 慶子……………一口
 - 幸谷 恵子……………三口
 - 児玉 利子……………三口
 - 佐々木 玉……………三口
 - 佐藤 哲夫……………二口
 - 谷本 親史……………三口
 - 永松佐世美……………一口
 - 早澤まり子……………一口
 - 原田 勝子……………二口
 - 平田千代子……………二口
 - 本田 圭子……………二口
 - 宮川三保子……………三口
 - 森山 秀子……………一口
 - 吉田 素子……………二口
 - 和田 明美……………三口
 - 白土 正江……………三口
 - 時松由美子……………三口
 - 立花真由美……………三口
 - 天田 泉美……………三口
 - 河野 洋子……………一口
 - 竹尾 友彦……………二口
 - 山田 錚一……………六口
- ※ご協力ありがとうございました。

やまなみ牧場俳句大賞

〓 締切9月30日〓

- ※当協会後援の俳句大会です
- ※九重や牧場の体験を題材に三句
- ※投句料は無料(入賞した場合表彰式に出席できる人のみ)
- ※入賞者には豪華賞品多数
- ※詳しくは牧場ホームページを

令和六年八月三十日発行

会報第百三十一号

発行人・有村 王志

発行所・大分県現代俳句協会

編集人・足立 攝

大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:http://gendaihaiku.net

E-Mail: info@gendaihaiku.net

